

論文内容要旨

論文題名

Reference values of Focused Assessment with Sonography for Obstetrics (FASO) in low risk population

掲載雑誌名

The Journal of Matern Fetal Neonatal Medicine. 2016年

掲載予定

産婦人科学講座 大場智洋
外科系 産婦人科学 専攻

内容要旨

目的：分娩後の大量出血は、母体死亡に繋がる可能性がある。そして、分娩後の大量出血に際し、産科医は母体の蘇生治療を行いつつ、大量出血の原因を検索しなければならない。救急医学科では、外傷患者の搬入時に迅速に施行できる腹部超音波検査 (Focused Assessment with Sonography for Trauma: FAST) が広く普及している。産科危機的出血の場合にも FAST と同様な系統立てた腹部超音波検査が必要であると考え、Focused Assessment With Sonography for Obstetrics (FASO) と名付けたプロトコールを作成した。本検討では、FASO の導入にあたり、その基準となる分娩後の腹部超音波検査所見を明らかにすることを目的とした。

方法：2015年3～9月に経膈分娩直後の産婦に仰臥位で腹部超音波検査を施行し、prospective cohort study を行った。評価項目は、子宮内腔の厚さと形状、モリソン窩、脾腎境界、ダグラス窩の echo free space、下大静脈径とした。また、当院の産科危機的出血例で FASO を施行した例の腹部超音波所見を検討した。本検討は、倫理委員会の承認を得て行った。

結果：経膈分娩後の 182 例における検討では、分娩時出血量 (mean ± standard deviation) は 618 ± 537 g、子宮内腔の厚さは 9.8 ± 7.3 mm であった。ダグラス窩の echo free space を認めた例は 3 例 (1.6%) で、モリソン窩の echo free space を認めた症例は 1 例 (0.5%) であった。脾腎境界の echo free space の陽性例はなかった。下大静脈径は吸気時： 11.4 ± 4.1 mm、呼気時： 13.1 ± 4.2 mm であった。分娩時出血量と下大静脈径との間に負の相関を認めた (吸気時： $r^2 = -0.061$, $p = 0.0008$ 、呼気時： $r^2 = -0.106$, $p < 0.0001$)。

考察：本検討では FASO の導入のための基準となる分娩後の腹部超音波検査所見を明らかにした。FASO は、胎盤遺残、子宮内反症、子宮破裂といった産科危機的出血の原因となりうる合併症の検出に有用であるばかりでなく、下大静脈径により循環血液量の低下の推定にも有用であると考えられた。